

## 地域統合のシンボルとしての小学校

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2018-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鷹股, 彩乃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00024975">http://hdl.handle.net/10297/00024975</a>

# 地域統合のシンボルとしての小学校

鷹股彩乃

- 1 はじめに
- 2 過疎化と入山宅地造成事業
  - 2.1 人口変化
  - 2.2 宮の前
    - 2.2.1 設立経緯
    - 2.2.2 宮の前の人びとの生活
- 3 地域統合のシンボルとしての小学校
  - 1.1 由比北小学校の歴史
  - 1.2 保護者と地域住民の考え
  - 1.3 教員の地域への思い
- 4 考察
- 5 おわりに

## 1 はじめに

入山にフィールドワークに行き初めて感じたのは、入山全体で、だれもが顔見知りであるということへの驚きであった。私の地元も町内などのつながりはあったが、町内の人とみんな顔見知りなどということはなかった。確かに町内の行事はあったし、そこである程度地域の人と顔合わせもする。しかしそのなかでも参加しない人はいるし、行事を運営する子ども会や青年会、老人会など年齢や性別ごとの集団があり、その枠を超えて接することはあまりなかった。そのため、町内でも知らない人が多い。入山に住む人びとのように誰がどこに住んでいるか（入山の人かどうか）を一目見ただけでわかるということは、そうした環境に育った私には特別なものに映った。

そして、次に驚いたのは由比北小学校と地域のつながりの強さである。後に詳しく述べるが、由比北小はもう小学校と直接かかわりのないはずのお年寄り（保護者でも生徒でもない人）の居場所となっていた。

ところで、現代はかつての村社会と異なり、移住してきた人びとと、もともとその地域に住んでいた人びととの共生が必要とされることが多々ある。その際、学校はかつての地域組織に代わるものとして、保護者という形で住民を結びつける役割がある。

伊藤亜人によれば、現在では人の移動が頻繁になり、より流動的な社会になるなかで、一つの共同体の部で旧住民と新住民との間に意識のずれが生じやすくなっている。そのなかで、かつての近隣関係や町内などの地域組織に代わって、比較的持続性のある新たな社会関係として、子どもが通う学校が保護者の関係を築く場となっているとしている。また、それに加え、個人の任意に基づく任意結社も新たな社会関係を築くものとなっており、こちらは地域共同体のような永続性に欠けるとしながらも、柔軟な活力として社会に結び付いているとしている（伊藤 2007:158~159）。

ここで伊藤は、都市部について述べているが、過疎化が進む地方については触れていない。

私は入山を通して、後者について考察したい。入山は一時的に新興住宅地が造営されたものの、基本的には移住者があまり現れず、過疎化の傾向にある。また、先に述べたように由比北小学校は、お年寄りのような児童の保護者ではない地域住民にも慕われている。このような地域と学校の関係は、過疎化地域においてどのような意味を持つのだろうか。

## 2 過疎化と入山宅地造成事業

まず本節では、入山の過疎化の現状と、人口減少に歯止めをかける目的で 1999（平成 11）年から実施された「入山宅地造成事業」の具体的な内容と経緯、事業によって誕生した宮の前の人びとの現在の暮らしについて述べたい。そして、そこから見えてくる宮の前の人びとの交流のあり方を考えていく。

### 2.1 人口変化

『由比町史』によると 2008（平成 20）年 4 月 1 日時点の由比地区全体の住民基本台帳人口は 9,950 人で、この時からさかのぼって 20 年の間に 1,760 人減少したという。また、世帯数は同日時点で 2,964 世帯であり、同じく過去 20 年間に 211 世帯が増加した。1 世帯当たりの人員は平均して 3.2 人となり、この数値から由比地区で人口の減少と核家族化、少子化の傾向が続いていることがうかがえる（由比町史編さん委員会 2008）。

また 2010（平成 22）年に行われた国勢調査によると、入山は人口総数 766 人（うち男性 383 人、女性 383 人）で、15 歳未満は 92 人、15 歳～64 歳は 456 人、65 歳以上は 218 人、世帯数は 234 世帯、平均年齢は 49.7 歳であった。高齢化率を計算してみると、その値は 28% となっており、入山が超高齢社会<sup>1</sup>だということがわかる。

くわえて、入山にある静岡市立入山こども園定員は、1983（昭和 58）年に定員が 70 名に増員されたのを最後に、定員が減り続けている。現在は定員が 30 名となっており、1983（昭和 58）年の定員の半分以下となっている。

こうしてみると入山は、少子高齢化の進む過疎化地域だということがわかる。入山こども園の園長を務める A 氏（女性、50 代）は、過疎化の理由を入山への愛着が薄くなっているからなのでは、と考えていた。そのため、子どもたちが少しでも入山に愛着が湧き、大人になっても入山に残り続けるよう子どもたちが入山の自然に触れられる活動を行っているという。具体的にはサワガニをとる、廃材で船をつくって川に流す、園内に生えているサクランボやブルーベリー、キンカンなどを収穫し、そのまま、またはジャムにして食べるなどの活動である。

こうした取り組みを行う入山こども園であるが、もともとは 1979（昭和 54）年に由比町立保育園として設立された。その後 2008（平成 20）年に静岡市立入山保育園となり、2015（平成 29）年には現在の「幼保連携型認可入山こども園」となった。内閣府の定義によれば、「認可こども園」というのは教育・保育を一時的に行う施設である。特に入山こども園のような幼保連携型のこども園は、幼稚園的機能と保育的機能の両方を併せ持つ単一の施設である。職員は幼稚園教諭と保育士資格を併有していることが定められている。これにより、入山こども園では子どもの預かり時間を幼稚園のように短くできたり、反対に保育園のように長くできたりと、より柔軟な体制となった。新体制による少子化、過疎化に歯止めがかかることを期待したいところだが、人口増加の兆しは現在のところない。

<sup>1</sup>国連の定義によると、「高齢化社会」は高齢化率が 7%以上 14%未満、「高齢社会」は高齢化率 14%以上 21%未満、「超高齢社会」は高齢化率 21%以上の社会のことである。

## 2.2 宮の前

### 2.2.1 設立経緯

過疎化への懸念から、入山を含む由比地区では宅地造成事業が行われた。以下はそれに至った経緯について書かれた『由比町史・補遺』の記述である。なお、由比地区は2008（平成20）年、静岡市に合併する以前は由比町であった。

由比町は山間地が多く、由比川・和瀬川の流域及び沿岸部の平坦地は、古くから人びとの生活の中心地として開け、その大半は住宅・公共用地として利用されてきた。また、山間地の多くは急傾斜地で、農林業の用地として土地利用がなされているが、由比川より西の傾斜地は、脆弱で崩壊しやすい地形であり、わずかに残された開発適地も土地保有者の保有志向などにより、宅地供給余力が少なくなっており、住民の町外流出をまねく一因となっている。

このような地形的な制約を背負っているなかで、この限りある土地を適切・有効に活用していくことが重要な議題となっていた。特に1995（平成7）年過疎地域活性化特別措置法により過疎地域の指定を受けた由比町にとって過疎からの脱却が町の最重要課題となり、このため過疎地域活性化計画を策定し、町内からの転出に歯止めをかけるとともに他市町村からの転出を促し、人口の増加を図ることが過疎脱却の最善の施策とし、その中核事業として宅地造成事業が計画実施された（由比町史編さん委員会 2008:195-196）。

この事業の1つである入山宅地造成事業は、1999（平成10）年から2000（平成11）年にかけて行われ、現在そこは宮の前と呼ばれている。分譲区画数は20区画で、当時66人が宮の前へ移り住んだとされる。そのうち、当時の由比町内から越してきた人は8世帯29人で、町外からは12世帯37人と、町内よりも町外から越してきた人が多かった。

ところで、入山には平部落と山部落がある。「平部落」というのは、入山の比較的平地に位置する向山、諸木沢、宮の前、山内、中村の5つの部落のことである。これに対し、「山部落」というのは入山の比較的山間部に位置する、桜野、舟場、槍野、香木穴（鍵穴、桑木穴ともいう）、久保山、大代の6部落のことである。このうち、入山の平部落の1つである向山に住むB氏（男性、70代）は、宮の前ができた当時のことを振り返り、「はじめは若い人を対象に宮の前をつくったが、若い人はあまり集まらず、『入山で老後を過ごしたい』と考える年配の人が多く住むことになった。また、若い世代が生んだ子どもたちも大きくなると入山からでて生活をするのが多く、結局過疎化が進んでいる」と述べた。

このように少子高齢化と過疎化に歯止めをかけるべく打ち出された入山宅地造成事業であったが、結果的には若者はあまり集まらず、お年寄りが多く住むという結果となった。

### 2.2.2 宮の前の人びとの生活

次に、宮の前ができた当初から現在に至るまでの経緯をおおまかに説明し、その後に宮の前の人びとの生活を記述する。

まず宮の前ができるまでをみていく。宮の前は向山と諸木沢の間に位置する。北山内に長く住んでいるC氏（男性、70代）は、宮の前が向山と諸木沢の間にできた理由を「平らな地形があそこにしかなかったから」と語る。もともとこの地は向山で、ミカン畑だったそうで、八幡神社の前にあることから「宮の前」と呼ばれていたという。現在19の世帯が暮らしている宮の前だが、できてすぐの頃は数世帯しかおらず、だんだんその数を増やしてきた。世帯数

が少なかった当初は、向山として自治会に参加していた。その当時自治会長を務めていた B 氏（前掲）は以下のように語った。「宮の前はもともと向山だったが、19 世帯そろったときに宮の前の人達に『今後宮の前として自治会をやっていくか、今のまま向山としてやっていくか話しあって決めてほしい』と伝えた。その後、宮の前の人たちは向山から独立し、宮の前として独立することを選んだ」。

以上のように、宮の前はもともと向山であったが、世帯数が増えたことがきっかけで宮の前として独立した。また、この独立は宮の前の人びとの意志で決定された。

次に宮の前の住民へのインタビューをもとに、地区における住民同士の交流やイベントの参加状況について記述する。

宮の前に住む D 氏（女性、70 代）は宮の前に引っ越してきた理由を「土地が広いのに、値段が安く、日当たりが良かったから」と話す。最近ほどの世帯も子どもが大きくなってしまったため以前ほど盛んではないが、地区内で年に何回かバーベキューをしたり、犬を飼っている住民同士で交流したりと、地区内のつながりは強いように感じたという。引っ越してきた当初は入山の人たちと仲良くなれるか不安であったが、越してきてから 15 年以上経った今では、みんな顔見知りで、地区内の人も地区外の人も親しいと話していた。他の宮の前の人も皆が顔見知りで、なじみやすかったと話していた。

その一方、地区外の住民は宮の前にどういった印象を持っているのかというお話もうかがった。区外の住民はみな口々に「同じ入山の人だと思っている」、「もともと入山に住んでいた人も多く、よそ者だと思ったことはない」、「地区の 1 つとしてみている」など、肯定的な意見が多く聞かれた。確かに他の地区と同じように回覧板を回したり、八幡祭の時に宮の前の人びともできた当初から地区として祭りに参加したりしている。特に後者の八幡祭について B 氏（前掲）は、「宮の前の人たちが八幡祭に参加する際、古くから入山に住んでいる人の言うことに従ってくれる。嬉しい」と語っていた。くわえて八幡祭の運営をしている八幡祭委員は、かつては年配者が担っていたが、最近では若い人がやるが増え、そのなかには宮の前の住民もいるという。また、消防団を 30 年以上勤めあげた北山内在住の E 氏（男性）は、宮の前の住民について「宮の前の人が越してきて間もなく、入山の消防団である消防団第 3 分団に 3 人も入ってくれた。現在でもずっと参加してくれている。『地域に貢献したい、馴染みを持ちたい』という思いが伝わってきて嬉しい」と話していた。

以上のように、入山では古くからいた住民と宮の前への移住者とが一体となってお祭りや消防団など、地域の活動に参加していた。しかし、その一方で私は宮の前の住民が「もともとあるしきたりにのっとりながら、活動に加わる」というひかえめな姿勢で、地区外の人びとと交流しているような印象も受けた。

たとえば、庚申堂のお祭りの参加についてである。庚申堂のお祭りは、向山にある庚申堂神社（通称・庚申さん）で毎年 8 月、お盆が終わって最初の日曜日に開かれている。このお祭りには向山、諸木沢、中村の住民が参加し、各地区が一年交代で祭りの運営を担当している。祭りでは担当の地区がお店を出したり、盆踊りを踊ったりする。担当以外の地区の住民は参加しないため、この祭りが 3 地区の交流の場となっているわけではなさそうだった。

このお祭りに宮の前は参加していない。宮の前は、向山と諸木沢の間に位置していて、庚申堂神社からも遠くない。また、主に平部落のお祭りに八幡祭があるが、宮の前の住民は地区ができてすぐに参加していたという。ではなぜ、庚申さんのお祭りに宮の前は参加できないのだろうか。この疑問について諸木沢や向山の人にたずねると、「これから先、宮の前の人が参加するようになるのではないか」という意見もある一方で、「庚申さんは昔から向山、諸木沢、中村が守ってきた神社だから、これからも 3 地区で守っていく」という声も聞かれた。今後も庚申

さんのお祭りに宮の前を含む他の地区が参加することはなさそうであった。

こういった意見を宮の前の人が直接聞いているかはわからない。しかし、宮の前の住民も「庚申堂のお祭りは宮の前のお祭りでない（=庚申堂のお祭りは3地区の祭りである）」という認識を持っていたことも事実である。このように宮の前の住民は、古くから入山ある慣習に従いながら生活しているようだった。

### 3 地域統合のシンボルとしての小学校

第2節では、宮の前とその他の地区の人びとは、新住民と旧住民という関係にあり、新住民は旧住民の慣習や考え方を受け入れながら生活していることが明らかになった。

ところで、調査をしていくなかで、入山にある静岡市立由比北小学校（以下、由比北小）では、保護者と教員、そして地域住民が学校や地域が主催するイベントや活動に積極的に参加し、相互にかかわりあいながら、小学校の運営に力を注いでいることが明らかになった。その際、旧住民と新住民の垣根は感じられなかった。本節では、こうした由比北小を中心とした地域住民のつながりに注目したい。

はじめに、由比北小成立の歴史的経緯を由比地区の他の小学校と比較しながら述べていく。次に、保護者や地域住民の考えと、教員の入山に対する思いを記述し、そこから見えてくる由比北小と地域住民の関係性を考えたい。

#### 3.1 由比北小学校の歴史

ここではまず、『由比町史』から静岡市立由比北小学校の歴史を簡単に振り返る。由比北小の起源は寺子屋時代（江戸時代）にまでさかのぼる。寺子屋では教員が師匠と呼ばれ、僧侶や武士、医師等がこれを務めた。寺子屋の所在地は向山の遍照院で、1816（文化13）年から1840（天保11）年まで続いたとされる。ここで師匠を務めた大壽は、現在の由比地区東山寺にある林香寺の住職をやめた後、入山遍照院に隠居し師匠を務め、のちにできる入山学校の基礎をつくった。

『由比町史』によれば1872（明治5）年、学制発布から寺子屋は小学校に改められ、明治6年ですでに、全国で小学校は公立で8,000校、私立で1,500校に及び、学齢児童の40%にちかひものが就学することになったという。由比町でも1873（明治6）年1月に、阿僧村常円寺内に由比宿外9カ村を学区とする「学染舎」が設立され、当地における小学校の創始となったという（由比町史編さん委員会 1989:587）。

しかし、由比北小の前身である遍照院はここで学染舎にはならず、入山学校となった。また、ここで由比北小は由比地区の他の小学校とは違った変遷をたどっているのに留意したい。由比地区の小学校の変遷は以下の通りである（図1）。



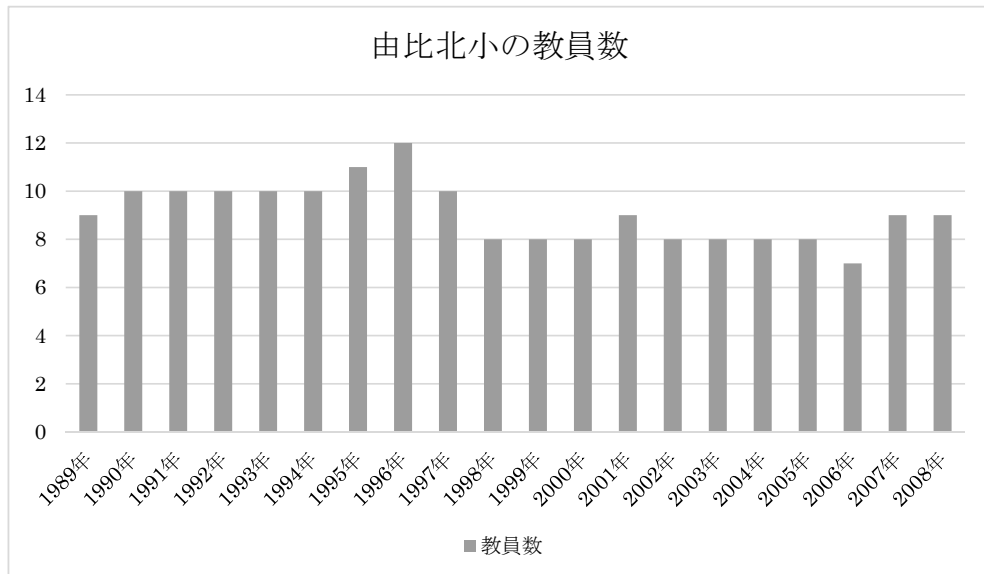


図3 由比北小学校の教員数の推移  
 (『由比町史 補遺』(2008)をもとに鷹股作成)

図2、図3を見るに、由比北小の児童数は1989(昭和64)年には120人を超えていたのに対し、2008(平成20)年では60人を割るまでに減少しているのがわかる。これに伴って教員の数も減少している。

また、現地調査の結果、現在の由比北小の児童数は30人ほどとなっており、ここ9年間でおおよそ児童数が半分になったことがわかった。児童数の減少の一因に、子育て世代が減少していることがあげられる。また、子どもの社会性を養う目的から、児童数が多い由比地区のもう一つの小学校、由比小に子どもを通わせる場合があるという。

こうした少子化の影響から、由比北小では運動会を入山こども園と合同で行い、それにPTAが全員参加している。しかし、少子化は必ずしもマイナスばかりでない。少人数教育のなかで、保護者や教員、そして入山に長らく住むお年寄りの間に新たな関係が築かれている。次節ではその点について詳しく述べていく。

### 3.2 保護者や地域住民の考え

前節では、由比北小が入山を学区とする小学校として、由比地区のなかでも独自の歴史をたどってきたことを述べた。由比北小のPTA活動をはじめとする学校の活動にはその歴史的な影響とも思える一端を感じることができる。また、そのなかに垣間見える保護者や地域住民の小学校や子育てに対する考え方も記述していく。

まず、入山ではPTA会費を、由比北小に通う子どもを持つ保護者だけでなく、入山の住民全員が支払っている。小学校に事務員として長く務めるF氏(女性、60代)はPTA会費について「PTA会費を払うことを拒む人はほとんどいない。またPTA会費が760円と半端な額であるということから、『1,000円でもいいよ』と言ってくれる人もいる」と述べた。

そもそもPTA(Parent-Teacher Association)とは、その名のとおり保護者と教員で構成されるはずである。これを踏まえると、保護者以外の人もPTA会費を払うという入山の会費徴



収の在り方は、独特といえる。また、会費を払うことを拒む人がほとんどいないということも注目すべき点である。向山に住むB氏（前掲）は、子どもがいなくなった今でも会費を払うことについて、『いつか自分もお世話になる』という意識が強いから払う」と述べている。また、小学校に長年勤めるF氏（前掲）は、入山では『地域全体で子どもを育てる』という考え方が深く浸透しているから」と述べていた。こども園に務めるA氏（前掲）も「0歳から15歳（中学生）まで子どもを地域で育てよう」という概念があることを口にしてきた。このように入山では保護者だけでなく、地域全体で子どもを育てようとする意識が強いことがわかる。かつてPTA会長を2度務めたB氏（前掲）は、「当時は仕事に支障をきたすほどみんなPTA活動に尽力していた」とも語っている。

これに対して、今まさに子育てを行っている若い世代はどう考えているのだろうか。現在、小学校とこども園に通う子どもを持ち、かつて静岡県富士川町（現・富士市）に住んでいたG氏（女性、30代）は「子どもの登下校を地域の方が見守っていてくれるので、安心する」と言っていた。また、小学生と中学生の子どもを持つH氏（女性、40代）は「子どもの登下校の道のりにあるお家はすべて顔見知りなので、子どもには『不審者が出たら、どの家でも良いから飛び込んで助けを呼ぶんだよ』と言っている」と述べていた。くわえて、H氏は「こども園の時から親子ともども顔見知りで、他の家の子でも微笑ましく見てしまう」とも言っており、子育て世代にも「地域で子どもを育てよう」という考えが受け入れられていることがわかる。

さらに、H氏はPTA活動について、「毎月1回理事会というPTA会議があるが、それに出席するのが当たり前になっている。子どもが中学にあがり、懇談会に出席したところ、ほとんどの人が出席していなくて驚いた。また、出席している人の大半が入山の人だった。きっと由比中学は由比北小ほど子どもの数が少なくはなく、全員が活動を熱心にやらなくてもやっていけるからだろう」と語った。ここからは、由比北小のPTA活動が今でも熱心に行われていることがうかがえる。また、子育て世代にとって「PTA活動はみんながやらないとやっていけない」ものなのだということもうかがえた。また、「子どもの人数が少ない分、1人当たりの仕事量が多くて大変」という声も聞かれた。PTA活動は月1回の理事会に加え、八幡祭で出店する学級部や、入山全体の体育祭の手配をする体育部など、分担する仕事があるそうだ。これを全校30名ほどという小規模の由比北小で運営するのは、確かに容易なことではないだろう。「PTA活動は当たり前にするもの」、「仕事が多くて大変」などいろんな思いがありながら、PTA活動は運営されているようだ。

くわえて、小学校主催のリサイクル活動に、ほとんどの地域住民が協力的だそうだ。リサイクル活動は5月、9月、2月に行われ、缶や古紙などの資源を回収する運動である。小学校に長年勤めるF氏（前掲）は「地域の方は子どものいる家庭も、そうでない家庭も、この活動のためにわざわざ資源を集めておいてくださいます」と嬉しそうに語った。保護者としてリサイクル活動に参加しているH氏（前掲）は「PTAのOBの方が、トラックを貸して下さる」とも言っていた。また、由比北小の運動会の観覧や、放課後子ども教室のボランティア活動などの学校行事に、地域住民が積極的に参加しているそうだ。特に放課後子ども教室では、地域住民のお年寄りが自らボランティアとして足を運び、体育館や校庭で遊んでいる児童や、学習室で勉強している児童の見守りをしている。時には児童たちと遊んだり、勉強やちょっとした小物の作り方を教えたりすることもあるそうだ。

こういった地域住民の積極的な学校活動の参加についてF氏（前掲）は「地域の人は学校のことを思い、子どもたちを思っているのが日々伝わってきます。また、入山では子どもを地域で育てようとする方が多いのです」と繰り返し述べていた。

このように由比北小や子どもたちは、地域住民から大切にされている。地域には「子どもを

地域で育てよう」という考えがあり、それが若い世代にもある程度受け入れられている。また、学校行事に積極的に参加する地域住民が多いことはすでに述べたが、こうした人たちにとって小学校は自分たちの居場所となっているのではないだろうか。私のこの考え方を裏付けるのが、少子化にともない持ちあがった由比小学校と由比北小の合併問題をめぐる次のような経緯である。2008（平成20）年に静岡新聞に小規模な学校を統合するとして記事が出た際、地域住民から「もし由比小との合併の話があがったら、合併を止めるための署名運動をしたいからすぐに言ってほしい」という声があがったようだ。こういった声をあげるのは、児童の親よりもっと高齢で、古くから入山に住む人たちだそうである。そうした地域住民が、由比北小がなくなるとを強く拒むのは、由比北小が、自分が必要とされる居場所、あるいは心のよりどころになっているからではないだろうか。

### 3.3 教員の地域への思い

前章では、入山に古くから住むお年寄りにとって由比北小が、自分が必要とされる居場所や心のよりどころになっていることを述べた。これに対し、由比北小の教員は学校にどういった思いを抱いているのだろうか。

まず、歴史的な由比北小の教員と入山の関係をみていく。かつて入山では、異動してきた教員は地域住民の自宅に下宿していた。地域住民と生活を共にするため、入山になじみやすかっただろう。現在では自動車の普及によって、この習慣はなくなってしまったそうだが、当時教員と地域との距離が近かったことは間違いなさそうである。また、今は10年に3つの学校を異動すべきとする「10年3校」と呼ばれる制度があるが、かつてはそういった制度はなく、長い間同じ小学校に勤務することが可能であった。1974（昭和49）年から1977（昭和52）年頃に由比北小の中村助次校長が八幡祭、鈴木ゆうじ教頭が1973（昭和48）年に入山音頭といった地域に根差した企画を打ち立てたという事実も、入山に親しみを感じていたからこそ発起したのだと思う。この入山音頭というのは、歌詞に入山の地区名がすべて入った歌に合わせて踊る音頭のことである。踊りが難しかったため、最近まであまり踊られてはいなかったが、2016（平成28）年から盆踊会（由比に存在する様々な盆踊りを廃れないようにつとめる団体）の人びとによって、子どもが踊れるような簡単な振付に変更し、小学校やこども園の子どもたちによってたびたび披露されるようになった。披露される場合は八幡祭や運動会など入山内にとどまっておき、まさに地域に根差したものである。

次に、現在の由比北小の教員と地域の関係を見ていく。小学校に長年勤めるF氏（前掲）の言葉からもわかるように、地域住民の小学校に対する思いは教員にも伝わっている。他の教員にも話をうかがったところ「他の小学校に比べ、地域の方との距離が近い」「歩いていると地域の人が声をかけてくれる。自分が学校の教員であることを認識してくださっているのだと思う」など、地域住民たちの教員への気遣いが教員にも伝わっているようだった。これに対し、教員も地域に溶け込むべく努力している。たとえば、平部落の祭りである八幡祭では、必ず新任の教員が参加し、そこで歌や踊りをするそうである。また、校長や教頭も八幡祭に駆けつけ、子どもたちが担ぐお神輿について行ったり、子どもたちの相撲大会に付き添ったりしているという。

これについて、中学生と小学生の子どもを持ち、PTA活動にも参加しているH氏（前掲）は「八幡祭では『いつもお世話になっています』と言って先生が私たちに声をかけてくれる。他にも愛校作業（学校行事で使われる『やまぼとの森』の草刈り運動）の時にも話すことが多い。先生との距離が近いので、子どもに関して何か相談したいことがあるときは学校に気軽に電話をかけたり、職員室に行って声をかけたりする」と言っていた。このように、保護者も教

員との距離の近さを認識しているようだった。

また、少子化の影響で、教員の数が少ないため、1人の教員の存在感が大きいそうだ。F氏（前掲）曰く、「1人先生が変わるだけで、クラスや職員室など学校全体の雰囲気は全く変わる」という。これは少人数ならではの教員と児童の関係性であるといえよう。

ここまでの記述からは入山には、歴史的に教員が地域に親しみをもちやすい環境が整っていたこと、現在は少子化によって学校での教員1人の影響力や存在感が強いこと、地域住民が小学校を大切にしているということが教員にも伝わっていることなどが明らかになった。次節では、これまでのまとめを述べたのち、1節で紹介した伊藤の都市部のコミュニティにおける小学校の役割の分析と比較しながら、入山における由比北小の役割を述べ、考察していく。

#### 4 考察

本章では、過疎化地域である入山において学校がどのような役割をもっているのかについて考察するために、第2節では、過疎化や少子高齢化への対策として造営された宮の前について述べるとともに、第3節では入山住民が共有している「地域で子どもを育てよう」という意識や、由比北小と地域住民との密接な関係について明らかにしてきた。

以上を踏まえて、都市部における小学校の役割に関する先行研究を振り返り、入山の由比北小と比較し、考察する。

第1節でも紹介した伊藤亜人の研究は、人の移動が頻繁に行われる流動性の高い都市社会を分析対象としていた。これに対して、入山は宮の前ができた際に人の流入があったものの、基本的には人の出入りは頻繁ではなく、比較的固定的な社会である。また、伊藤は流動的な社会へと変容するプロセスにおいて、旧住民と新住民との間に意識のずれが生じていると指摘している。そしてその際、かつての近隣住民や町内などの地域組織に代わって、小学校が比較的持続性のあるものとして保護者間の関係を築くものとなっているとしている。一方、入山では、宮の前に新しく引っ越してきた人びとが「もともとあるルールにのっとる」という姿勢を保ちながらも、八幡祭や消防団に積極的に参加したり、入山のお年寄りがよく口にする「入山全体で子どもを育てよう」という考え方を、子育て世代が肯定的に受け入れていたり、地域の社会組織が依然として残っていることにくわえ、旧住民と新住民の意識のずれというものがそれほど顕在化していないようにみえる。

次に、都市部と入山の小学校の役割の違いを見ていく。伊藤によると、都市部の学校が保護者間の新たな関係性を築くとともに、永続性に欠けるとしながらも、そこに個人の任意に基づく任意結社も成立するという。入山でも同じように保護者がこども園や小学校にかかわるなかで新たな関係性を築いていくことを確認することができた。しかし、入山の場合は保護者だけでなく、地域全体が学校の活動にかかわり、そしてさらに学校側も地域の活動にかかわっていくことで、関係性を築いていることに留意したい。その例としてあげられるのが、PTA会費の徴収対象が入山の住民全員であることや、放課後子ども教室にボランティアとして参加する地域住民が子どもの面倒を見てくれること、地域のお祭りである八幡祭に教員が参加することなどである。

以上に見てきたように、入山において由比北小学校は世代を超えて地域住民を結び付ける場所となっている。しかし、少子化によりPTA活動を行う保護者の仕事量が多いことから「大変だ」と思われることもあり、子育て世代全員が全面的に小学校から生まれる関係性をプラスにとらえているわけではない。その一方で、古くからの住民は、ボランティア活動や授業参観など参加義務のない学校のイベントに積極的にくわわっており、比較的この関係性をプラスに

とらえているようだ。また、小学校の合併に年配者からの反対の声も多く、そうした状況からは由比北小が古くからの住民の居場所となっていると同時に、住民の地域への帰属意識（アイデンティティ）の拠り所であることが指摘できる。

こういった役割を由比北小が担うようになった要因は、由比北小が由比地区において独自の歴史を歩んできたこと、少子化が進み、地域全体を巻き込まないと小学校の行事やPTA活動がままならないこと、「地域で子どもを育てよう」という考えが入山にあること、過疎化が深刻で、新しい人が入ってくることが少ない地域であることなどがあげられる。

以上のように、世代を超えて地域住民を結び付け、古くからの住民のアイデンティティの拠り所ともなっている由比北小学校は、地域統合のシンボルとしての役割を担っているといえる。

## 5 おわりに

入山では過疎化が深刻で、私が重点的に調べた宮の前や由比北小学校のいずれの話題にも、この問題はついて回った。入山の人びとは半ば過疎化をあきらめているような表情を見せる時もあった。しかし、過疎化によって由比北小を中心とした年代を超えた関係性が築かれていることも事実である。そして、入山に昔から暮らすお年寄りたちの心の拠り所ともなっている。私は決して、過疎の問題を美化したいわけではない。しかし、「過疎化は解決するのが困難で絶望的な問題だ」という言葉にはあてはまらない人びとの営みが入山にはあるように思う。流動的な社会になりつつある現代において「面倒くさい」「うっとしい」といったイメージを持たれやすい町内やPTAといったつながりが、一方で、過疎地域では住民のアイデンティティとなったり、居場所となったり、自己の存在を確固たるものにする機能を果たすのではないか。過疎化を一口に良い、悪いというのは難しいが、そこに住む住民1人1人の声を聴いていくなかで、過疎化がもたらす地域への影響が必ずしもマイナスばかりではないという新たな知見を得られるのではないだろうか。

## 謝辞

本当にたくさんの方々のご協力のもとで報告書を書きあげることができました。見ず知らずの私に大変親切に、温かく、熱心にお話をしてくださり、調査をするにあたって大変励みになりました。本当にありがとうございました。

## 参考文献

伊藤亜人

2007『文化人類学で読む 日本の民俗社会』有斐閣。

筑波大学民俗学研究室

2011『フィールドへようこそ！2010 由比の民俗 静岡県静岡市清水区由比』。

由比町史編さん委員会

1989『由比町史』由比町教育委員会。

由比町史編さん委員会

2008『由比町史 補遺』由比町教育委員会。

高齢社会の定義 内閣府（2017年9月29日取得、

[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1\\_1\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1_1_1.html)）。

平成 22 年国勢調査結果 総務省統計局 (2017 年 7 月 18 日取得、  
[http://www.city.shizuoka.jp/000\\_001589.html](http://www.city.shizuoka.jp/000_001589.html))。

幼保連携型認定こども園の概要、認定基準 内閣府 (2017 年 9 月 29 日取得、  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/gaiyou.html>)。